

受賞タイトル：日本読書学会 2015 年度読書科学研究奨励賞

受賞論文：福田由紀・檜原拓真（2015）．朗読をすると気分が良くなるのか？—音読と比較して—
読書科学 57 巻、23-34.

概要：物語を読んだ際、私たちは登場人物の置かれている状況を理解し、彼らの感情を認知し、彼らと同じ方向の感情を感じている状態、つまり感情移入をすることがある。そのような感情移入を促進する手立てを本研究では検討した。

最近の国語教育では、文章を声に出して読み上げる音読や朗読が重視されている。特に、朗読は音声に感情を込めた発声方法として注目されている。音声に感情を込めるためには、読み手は次のような 2 つの段階を経る必要がある。第 1 段階では、対象の文章内容を深く理解し、解釈する。その心的活動の結果を利用して、第 2 段階では、文章全体や場面、登場人物の気持ちに一致した感情を声にこめて発声を行う。よって、朗読をすることにより、読み手は登場人物に感情移入をする可能性があると考えられる。

そこで、本研究では、朗読が読み手の感情移入を引き起こさせるか否かについて検討した。具体的には、朗読によって、物語が内包している感情と同じ方向に読み手の感情状態が促進されるかについて、音読と比較した。本研究の対象はすべて大学生であり、予備調査と実験 1・2 からなる一連の実験が行われた。

予備調査によって、3 物語中、もっともポジティブである 2 つの物語を選定した。これらの物語は朗読の影響を検討する実験 2 で材料として使用される。

次にどのような読み方が聞き手に朗読と評価されるのかを実験 1 で検討した。その結果、朗読とは「声に抑揚や強弱があり、登場人物ごとに声色が変わっていて、なおかつ発声が明確な読み方」という 4 つの特徴をもった読み方であることがわかった。一方、音読とは「声に抑揚や強弱がなく、登場人物ごとに声色が変わっていないが、発声が明確な読み方」であることが明らかにされた。

実験 2 では、ポジティブな物語を朗読することによって、音読の場合よりも、読み手の感情がポジティブになるかどうかの実験を行った。朗読する際には、実験 1 で得られた朗読の特徴をもった発声方法を実験参加者ができるように、あらかじめ練習を行った。実験材料を朗読する／音読する前と後に読み手の感情を測定し、得られたデータを前後で比較した。その結果、ポジティブな感情を内包している物語を朗読することにより、音読する場合よりも読み手の感情はポジティブになることが明らかになった。

このように、単に声に出して文章を読むのではなく、声に抑揚や強弱をつけ、登場人物毎に声色を変え、明確に発声することで、読み手の感情には変化が生まれる。つまり、朗読という読み方は、読み手が登場人物に感情移入する手立てになっていると考えられる。この結果は、読み手に深い読みを指導する場合の朗読の有効性を示唆している。今回は朗読の第 2 段階の発声の前後に注目して読み手の感情を検討した。今後は第一段階、つまり黙読するときの読みの深さや感情状態について検討していく。

以上